

万由美の 昼膳 交遊録

会員の
輝いている人

篠塚恭一さん

NPO法人日本トラベルヘルパー協会理事
株式会社SPIあ・える倶楽部代表取締役
おすすめる昼膳

代官山 米花

よねが



「車いす生活の母親と昔行った思い出の場所をもう一度訪りたい」「介護施設で暮らす父親を温泉旅行に連れて行ってあげたい」：そんな願いを叶えてくれる、介護と旅のエキスパート「トラベルヘルパー（外出支援専門員）」同行の「介護旅行」を専門とする、株式会社SPI「あ・える倶楽部」代表取締役の篠塚恭一さんにお会いしました。
ランチに訪れたのは、「代官山 米花」。同店名物の土鍋炊きごはんと家庭料理を頂きながら、介護旅行のバイオニアである篠塚さんの素晴らしい取り組みについて伺いました。

介護と旅の専門家「トラベルヘルパー」

専門学校卒業後、大手旅行会社で添乗員を勤めた後、人材派遣会社で派遣添乗員の育成に従事、その後一九九一年にSPIを設立し、介護旅行を手掛けるようになった篠塚さん。九五年からトラベルヘルパーの育成を開始し、介護が必要な人とそれを周囲で支える人、そして介護旅行のリピーターを中心にしたネットワーク「あ・える倶楽部」を立ち上げ、介護旅行の全国普及に取り組み始めました。「Active&Enjoy-Life」の頭文字を取った「AEL」あえる」には、人に会える、いい旅に会える」という意味が込められているとか。それは、篠塚さんのこんな思いからスタートしました。

「僕が二十代の頃、添乗先で常連の老婦人に『もし大好きな旅を止めるとしたら、それはいつですかね?』と訊ねると、『そうねえ...これからもっと年をとって自分で旅行バッグが持てなくなつた時かしら』と。高度成長時代、ひたすら働き続け日本を支えてきた人たちが、定年を迎えてようやく旅を楽しめるようになった時、多少の時間とお金のゆとりはできたのに、寄る年波で健康に不安があったり身体に不自由があるために旅ができなくなる。それではあまりにも切ないなと。当時、そうした六十、七十代の方の添乗をしていて、明治・大正の人たちというのは堂々としてカッコいいなあといつも

